

6 3 6 1 - 1 3 1 6
平成 2 2 年 1 月 2 6 日

各関係機関の長
各病虫害防除員 殿

宮崎県病虫害防除・肥料検査センター所長

平成 2 1 年度病虫害発生予報第 1 0 号について
平成 2 1 年度病虫害発生予報第 1 0 号を発表したので送付します。

平成 2 1 年度病虫害発生予報第 1 0 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

発生予報の概要

作物名	病虫害名	発生量の 平年比	記載ページ
施設野菜全般	病害全般	-	2
	タバココナジラミ類	-	2
冬春キュウリ	べと病	並	2
	うどんこ病	並	3
	灰色かび病	並	3
	褐斑病	並	3
	つる枯病	-	3
	ミナミキイロアザミウマ	並	3
	タバココナジラミ類	やや多	4
	病虫害全般	-	4
冬春ピーマン	斑点病	やや少	4
	うどんこ病	並	4
	アザミウマ類	やや多	4
	黒枯病	前年、前々年より少ない	5
冬春トマト	葉かび病	並	5
	灰色かび病	やや多	5
	タバココナジラミ類	並	5
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	-	6
冬春イチゴ	うどんこ病	やや多	6
	アブラムシ類	並	6
	ハダニ類	やや少	6
	コナジラミ類	-	

作物の生育状況 (1月中旬)

冬春キュウリ、冬春ピーマン、冬春トマト、冬春イチゴは収穫期であった。

向こう 1 か月の気象予報

天気は平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温は高い確率 50%、降水量は平年並または多い確率とともに 40%、日照時間は、平年並または少ない確率とともに 40% と予想されている。
(1 か月予報 鹿児島地方気象台 1/22 発表)

発生予報の根拠および防除対策

施設野菜全般

1 病害全般

1か月予報によると、天気は平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温は高い確率50%、降水量は平年並または多い確率ともに40%、日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%と予想されている。このため、平年と比較して暖房機の稼働が短くなる可能性があり、多湿による各種病害の発生が懸念される。最低気温など気温の変化には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底する。

また、コスト低減のため、夜温を低めに管理したりハウスサイドや内ホ口を多層被覆するなど様々な対策が取り組まれているところでは、施設内が多湿になりやすく、病害の発生が助長される傾向があるので特に注意する。

キュウリ：べと病、灰色かび病、菌核病、斑点細菌病、褐斑病など

ピーマン：灰色かび病、菌核病、斑点病、黒枯病、軟腐病など

トマト：疫病、灰色かび病、菌核病、葉かび病、すすかび病など

2 タバココナジラミ類（*タバココナジラミ* *ハ・イオタイプQ*、*シルバーリーフコナジラミ*）

[予報の根拠]

- (1) 冬春キュウリでの発生面積率60.0%（平年25.4%）は平年より多、100葉当たり虫数3.3頭（平年2.9頭）は平年並である。
- (2) 冬春ピーマンでの発生面積率6.7%（前年7.1%、前々年20.0%）、100葉当たり虫数0.1頭（前年0.9頭、前々年1.1頭）はいずれも前年、前々年より少ない。
- (3) 冬春トマトでの発生面積率38.5%（平年25.2%）、100葉当たり虫数1.0頭（平年2.5頭）はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) タバココナジラミ *ハ・イオタイプQ* と *シルバーリーフコナジラミ* の形態上の差異は、肉眼での区別は困難である。
- (2) 多発するとスス病を併発して商品価値を著しく損ねるので初期防除を徹底する。
- (3) 低密度でも、トマトではトマト黄化葉巻病（TYLCV）を媒介したり、ウリ科作物（メロンやキュウリ）では退緑黄化病（CCYV）を媒介することが明らかになっているので、特に注意が必要である。
- (4) 防除対策については、トマトのタバココナジラミ類（5ページの3）を参照のこと。

冬春キュウリ

1 べと病（並）

[予報の根拠]

- (1) 1月中旬の発生面積率50.0%（平年70.9%）、発病葉率5.4%（平年15.4%）はいずれも平年より少である。
- (2) 向こう1か月の天候は、平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温は高い確率50%と予想されている。
- (3) 1月第4半旬の気温が特に高く、本病の発生・蔓延に好適な条件が続いた。

[防除上の注意]

- (1) 湿度が高いときに発生しやすく、激発すると防除が困難となるので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。
- (2) 窒素切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

2 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

(1) 1月中旬の発生面積率35.0% (平年46.1%) は平年並、発病葉率1.0% (平年4.5%) は平年より少である。

[防除上の注意]

- (1) 病勢が進展してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおく。
- (2) 薬剤耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- (3) 乾燥時に多発するので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

3 灰色かび病 (並)

[予報の根拠]

(1) 1月中旬の巡回調査では発生未確認である。
(平年：発生面積率6.8%、発病果率0.3%)

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下を図り、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
- (2) 花卉等の発病に注意し、予防を徹底する。なお、薬剤耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

4 褐斑病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 1月中旬の発生面積率20.0% (平年43.4%) は平年より少、発病葉率3.1% (平年5.5%) は平年よりやや少である。
- (2) 向こう1か月の天気は平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温は高い確率50%と予想されている。
- (3) 1月第4半旬の気温が特に高く、本病の発生・蔓延に好適な条件が続いた。

[防除上の注意]

- (1) 多発してからの防除は困難なので、初期防除を徹底する。
- (2) ベと病の後に激発することがあるので、ベと病の発生が多い圃場では特に注意して予防を徹底する。
- (3) 窒素質肥料の多用は、発病を助長し過繁茂になって通風を妨げるが、草勢低下も好ましくないなので、適正な肥培管理に努める。
- (4) 摘除した発病葉は、ほ場外に持ち出し処分する。

5 つる枯病

[防除上の注意]

- (1) 農林振興局 (地域農業改良普及センター) からの情報では、本病の葉での発生が確認されている。
- (2) 多湿条件下や窒素過多、乾燥などによる草勢低下で発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (3) 発病前からの薬剤散布による予防に重点をおくとともに、カルシウム欠乏等によるカップング症状がでれば、本病が葉縁から侵入し、発病しやすくなるので早めに防除する。

6 ミナミキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

(1) 1月中旬の発生面積率5.0% (平年7.1%) は平年並、葉当たり虫数0.1頭 (平年0.2頭) は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) 多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除する。
- (2) 卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、7日間隔で2~3回の連続した防除を行う。

7 タバココナジラミ類 (やや多)

(1) 1月中旬の発生面積率60.0% (平年25.4%) は平年より多、100葉当たり虫数3.3頭 (平年2.9頭) は平年並である。

[防除上の注意]

(1) 防除対策については、トマトのタバココナジラミ類 (5 ページ) を参照のこと。

8 病害虫全般 (改植時の留意点)

[防除上の注意]

(1) ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は蒸し込み、少なくとも次作の定植まで7日程度の間隔を開ける。また定植時に粒剤を施用するなど次作の発生源を絶つように努める。

(2) 前作に褐斑病などの発生があった場合には特に注意し、定植後直ちに予防防除し感染を防ぐ。

冬春ピーマン

1 斑点病 (やや少)

[予報の根拠]

(1) 1月中旬の発生面積率6.7% (平年27.7%)、発病葉率0.1% (平年1.8%) はいずれも平年よりやや少である。

[防除上の注意]

(1) ハウス内が高湿多湿にならないように、換気と水管理に注意する。また、整枝を行って茎葉が過繁茂にならないようにする。

(2) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので、予防散布を行う。

2 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

(1) 1月中旬の発生面積率66.7% (平年59.0%)、発病葉率6.3% (平年6.2%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

(1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないように適正な水管理に努める。

(2) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので、早期発見に努め発病を確認したら早めに防除する。

(3) 上位葉への進展が見られるなど病徴の激しいほ場においては、1回散布では防除効果が現れにくいことがあるので、2回以上の防除を実施する。

(4) 微生物農薬は予防的効果が主であり、特にダクト散布では散布ムラが生じやすいので、定期的に化学農薬も併用する。

3 アザミウマ類 (やや多)

[予報の根拠]

(1) 1月中旬のミナミキイロアザミウマの発生面積率46.7% (平年41.0%) は平年並、10花当たり寄生虫数1.5頭 (平年1.4頭) は平年よりやや多である。

(2) ヒラズハナアザミウマの発生面積率46.7% (平年20.3%)、10花当たり寄生虫数7.2頭 (平年2.4頭) はいずれも平年より多である。

[防除上の注意]

(1) 今作はヒラズハナアザミウマの発生が多い状況で推移しており、生息密度が高まると被害が発生するので注意が必要である。

(2) ミナミキイロアザミウマは、10花当たりの寄生虫数が1頭から被害果が出始めるので、発見したら早めに防除する。

- (3) 卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、7日間隔で2～3回の連続した防除を行う。
- (4) 両アザミウマの薬剤感受性は異なるので、防除の際は使用する農薬に留意する。
- (5) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- (6) 被害の激しい茎葉・果実のハウス外への持ち出し、マルチ被覆、青色粘着板の設置により生息密度の低下を図る。

4 黒枯病 (前年、前々年より少ない)

[予報の根拠]

- (1) 1月中旬の巡回調査では発生を確認していない。
(発生面積率：前年21.4%、前々年26.7% 発病葉率：前年0.9%、前々年1.5%)

[防除上の注意]

- (1) ほ場内が多湿条件にならないよう換気に努め、排水を良好にする。
- (2) 被害茎葉、果実は伝染源となるので、ほ場外に持ち出し適切に処理する。

冬春トマト

1 葉かび病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 1月中旬の巡回調査では、13ほ場のうち1ほ場で微発生^(注)(発病葉率0.5%未満)である。(平年：発生面積率12.2%、発病葉率1.0%)

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- (2) 発病初期の防除を徹底する。

2 灰色かび病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 1月中旬の茎葉での発生面積率38.5% (平年10.6%)、発病株率0.9% (平年0.7%) はいずれも平年よりやや多である。
- (2) 果実での発生面積率15.4% (平年1.5%) は平年より多、発病果率0.2% (平年0.1%) は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下を図り、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等結露防止に努める。
- (2) 花卉等の発病に注意し、予防を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3 タバココナジラミ類 (シハ・リ・コナジラミ、外・コナジラミ P・イタイプQ) (並)

- (1) 1月中旬の発生面積率38.5% (平年25.2%)、100葉当たり虫数1.0頭 (平年2.5頭) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 黄色粘着トラップ等を設置し、タバココナジラミ類の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- (2) タバココナジラミバイオタイプQに効果のある殺虫剤は少ないことから、発見したら早めに防除する。薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- (3) 施設内外の雑草は、コナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
- (4) 有効な薬剤に対する抵抗性の発現を回避する観点から、同一系統薬剤の連用は極力避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を心がける。また、抵抗性発現

の可能性が低い微生物農薬や、コナジラミ類を物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込む。

4 トマト黄化葉巻病 (TYLCV)

[防除上の注意]

- (1) 発病株は伝染源になるので根ごと抜き取り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在し、発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。
- (2) タバココナジラミ類の防除対策は、前項 3 を参照のこと。

冬春イチゴ

1 うどんこ病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 1 月中旬の葉での発生面積率 64.3% (平年 31.9%) は平年より多、発病葉率 4.9% (平年 2.0%) は平年よりやや多である。
- (2) 果実での発生面積率 14.3% (平年 7.0%) は平年よりやや多、発病果率 0.3% (平年 2.0%) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 初め葉裏に発生しやすいので早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- (2) 激しく発病すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。
- (3) 発病果など被害部は伝染源になるので、早めに取り除きほ場内に放置しない。
- (4) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

2 アブラムシ類 (並)

[予報の根拠]

- (1) 1 月中旬の発生面積率 14.3% (平年 22.2%)、寄生株率 2.7% (平年 2.9%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 多発すると新葉の展開が不十分になり、奇形葉やスス病を併発して、樹勢や果実品質を著しく損ねるので注意が必要である。
- (2) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

3 ハダニ類 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 1 月中旬の発生面積率 28.6% (平年 48.5%) は平年並、寄生株率 1.6% (平年 12.6%) は平年より少である。

[防除上の注意]

- (1) 寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時から防除を徹底する。
- (2) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高まる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用は極力避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を心がける。
- (4) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

4 コナジラミ類

[防除上の注意]

- (1) 地域により薬剤感受性が低下したコナジラミ類の発生が確認されているので、地区の普及指導員や技術員の情報を参考にして防除に努める。
- (2) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

(注) 微発生とは、生息が確認されるが発生面積として換算する基準値に達しない密度の発生状況をいう。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認してください。
日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>
農林水産消費安全技術センターホームページ
(旧 農薬検査所) <http://www.acis.famic.go.jp/>
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤(商品名、マリックス乳剤、粒剤等)は使用しないこと。
- 3 発生量(程度)の区分

多い	(高い)	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い	(やや高い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並		平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない	(やや低い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
少ない	(低い)	やや少ないの外側10%の度数の入る幅 (平年値は過去10年間の平均)
- 4 予察情報の種類
病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。
 - (1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
 - (2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
 - (3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
 - (4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
 - (5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。
ホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>です。

【文書取扱】

病虫害防除・肥料検査センター 生頼
TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499
E-mail: byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp